

アクアリウム・ダイアリー

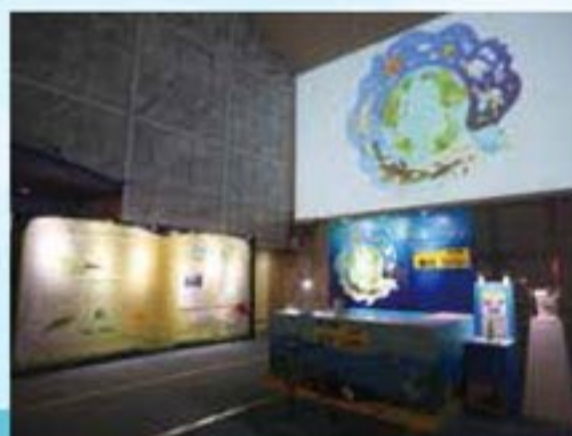
2021年12月～2022年2月

催し物

- 11月20日～12月25日
クリスマス季節展示
「バリアリーフアネモネフィッシュの
赤ちゃん誕生」
11月20日～12月25日
12月7日～1月16日
マイワシのトルネード クリスマスバージョン
干支展示「トラ似のいきもの」
オビトラフサンショウウオ展示
12月18日～25日
12月18日～
12月26日～
クリスマス衣装でのイルカパフォーマンス実施
特別展「豊かな海をいつまでも
～旅する水とめぐる海洋ゴミのいま～」開催
マイワシのトルネード 冬バージョン

【水族館スクール“君もドリトル先生になれるか!”】

- 12月19日 「飼育係のお仕事」 参加者 8組20名
1月16日 「飼育係のお仕事」 参加者 5組16名
2月13日 「飼育係のお仕事」 参加者 7組20名



特別展
「豊かな海をいつまでも」
開催

生物の出来事

- 1月
12月29日～
12月9日～
1月24日
1月26日
ペンギン雛(アデリー1、ヒゲ2、ジェンツー3)巣立ち
カメ類繁殖研究施設観覧再開
黒潮大水槽にてシイラ展示
なかがわ水遊園(栃木県)にブタバナガメ1個体譲渡、アカウミガメ当歳1個体貸し出し
黒潮大水槽にマイワシ搬入

来訪者

- 12月8日 金城学院大学 岩崎公弥子教授
12月14日・16日 名城大学 檜崎友子准助教
1月13日 写真家 水口博也氏
1月27日 名古屋学院大学 伊藤昭浩教授
2月27日 東邦大学 土岐田昌和准教授

講演・その他出来事

【講演など】

- 12月11日 あいち環境学習プラザ一般公開デー 水族館環境レクチャー 講師派遣
「ウミガメのためにできること ～ゲームで学ぼうウミガメの一生～」(加藤浩司・小倉仁)
12月14日 東京大学大気海洋研究所共同利用研究集会「水族館とフィールドワーク。その実際と可能性。」(オンライン)
「名古屋港におけるスナメリ調査のこれまでとこれから」(大島由貴)
12月14日・15日 第69回動物園技術者研究会(オンライン)
「ジェンツーペンギンの精子量の年変動」(材津陽介)
12月22日～24日 寄り鯨事業対応(12月14日に名古屋港で発見された鯨)
2月16日 日本動物園水族館協会オンラインワークショップ参加(小倉仁)
2月24日 第66回水族館技術者研究会(オンライン)
「名古屋港水族館における23歳齢のアカウミガメの初産卵」(森昌範)
2月25日 ペンギン類の飼育及び個体群管理勉強会(オンライン)
「ペンギン類を長期的に適切な状態で維持するために必要な個体群統計学と
遺伝学に基づいた個体群管理について」(材津陽介)

【職場訪問・水族館レクチャー(オンライン含む)】

14件 806名

【職場体験】

1件 2名

【ウミガメレクチャー(オンライン含む)】

5件 311名

編集後記

新年度、新学期に新生活。年度末を迎えて新しい一年が目前に迫っています。今年度はSDGsが一気に加速し、新しい価値基準が拡大しました。新時代に水族館が担う役割とは、成すべきことは何かを考えながら、新しいことに挑戦し続けていきたいと思えます。こうした挑戦によって得られた新しい情報は「さかなかな」を通してみなさんに発信できればと考えています。(大島)

表紙写真【クラゲといっしょにただより袋】

ウミガメはクラゲを食べますが、クラゲとゴミの区別は
むずかしく、ゴミも飲み込んでしまいます。

ニュースレター さかなかな Vol.113 2022年春
発行/公益財団法人 名古屋みなと振興財団 名古屋港水族館
〒455-0033 名古屋港区港町1番3号 TEL.052-654-7080
URL <https://nagoyaaqua.jp>
本誌の掲載記事、写真等の無断複製・複製転載を禁じます。

WEBサイト
<https://nagoyaaqua.jp>
(※一部の欄で記載していない場合があります)



さかなかな

2022 春

Vol.113

特集

豊かな海をいつまでも
環境問題を考える特別展の開催

- 水族館トピックス
- 水族館アカデミー ダーウィンの箱
- わたしのスケッチブック
- 水族館でSDGs
- 水族館スクールレポート
- アクアリウム・ダイアリー



名古屋港水族館

水族館の特別展と言えば、普段見ることのできない珍しい生態を持つ生物やきれいな魚を展示するイメージがありますが、今回の特別展は趣向を変えて「環境問題」をテーマにしました。タイトルは「豊かな海をいつまでも 環境問題を考える特別展の開催」です。また、新型コロナウイルス感染症拡大防止の意味もあって、特別展会場での「密」を避けるために館内に展示を分散させました。分散させた会場を「特別展」としてのつながりをもたせるためにスタンプラリーで楽しく回れるように工夫しました。この特別展は2021年11月18日から2022年3月21日までの予定でしたが、4月10日まで期間を延長して開催します。

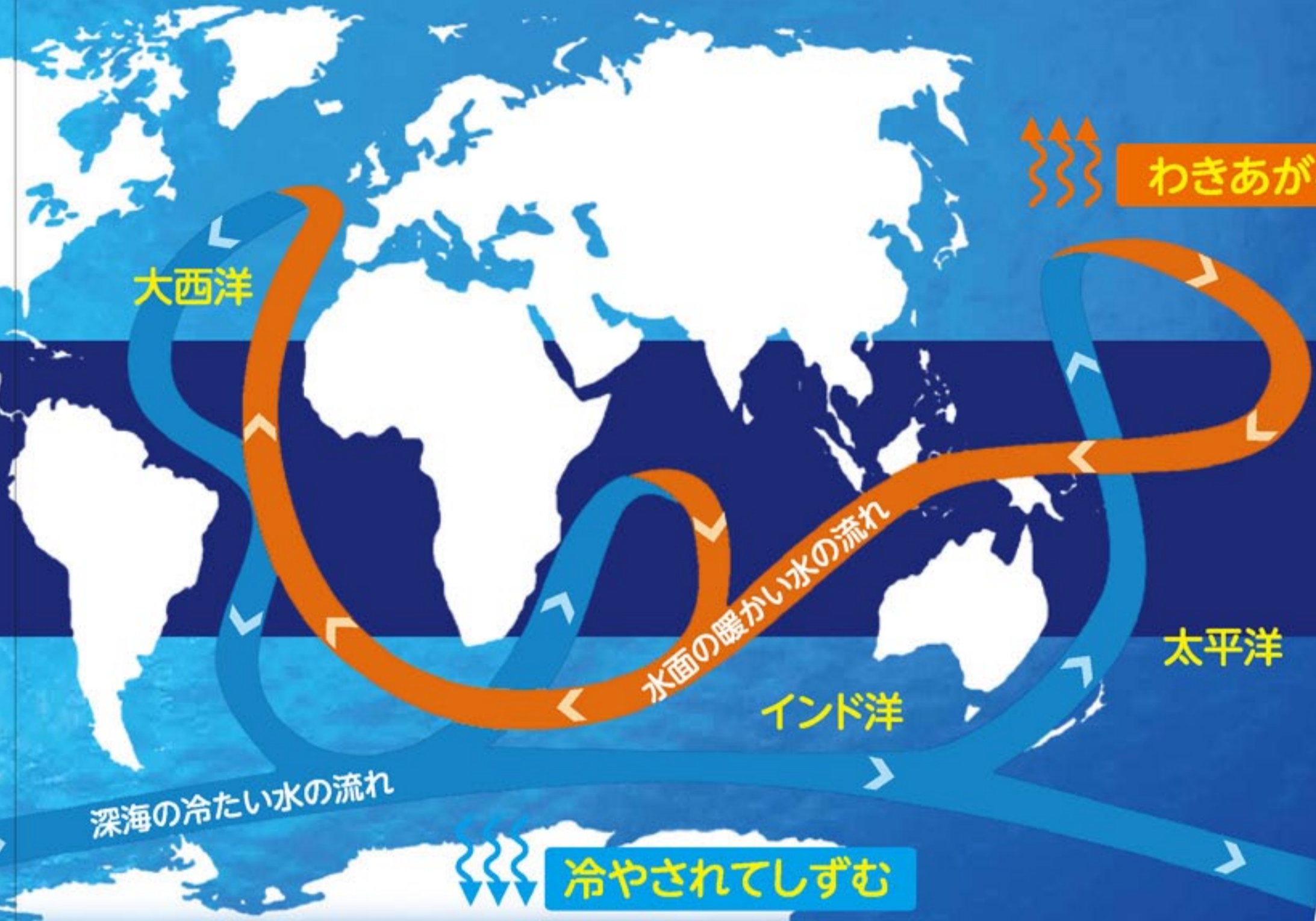
特集 豊かな海をいつまでも 環境問題を考える特別展の開催

館長 栗田 正徳

環境問題と言っても様々ありますが、いろいろな問題を取り上げるよりも、水族館の展示にふさわしい環境問題に焦点を当てることにしました。今回は海洋プラスチックゴミ問題に特に焦点を絞りました。世界中の海には河川などを通じて毎年1000万トンのプラスチックゴミが流れ込んでいともいわれています。自然では分解されにくいプラスチックは増え続け、野生動物に影響を与えるだけでなく、海を利用して生活している人々にも影響を与えています。水族館は海への開かれた窓のようなものです。水族館の使命として、こういった現状を伝えるとともに、どうやって解決していったらいいのか、皆さんと考える機会を持ちたいと思いました。

展示は、長い時間をかけて世界中を旅している「海水」が主人公の物語として展開していきます。一般に海水の流れというと黒潮などの海流を思い浮かべる方が多いと思いますが、今回の物語は地球全体をめぐる「海洋大循環」(図1)を題材にしました。もし「海水」に「記憶」があったら...地球を一周して同じ場所に戻ってきたとき海面に浮かぶプラスチックゴミの多さにびっくり!! 相棒のイルカと一緒に海洋プラスチックゴミの問題点と原因を探っていくお話です。物語は、南館の展示「南極への旅」ともシンクロしています。

スタンプラリーの台紙は絵本のようなスタンプ帳です。ただスタンプを押していくのではなく、物語のかぎとなる「イラスト」を絵本の中に押ししていきます。スタンプラリーをしながら絵本を完成させていきます。スタンプ帳には解説も載っているので、家に帰ってからも見返すことによって、水族館での楽しい思い出と一緒に特別展で学んだことも振り返ることができます。



【海洋大循環】

南極や北極の水は冷やされて重くなり、深海まで沈んでいきます。沈んだ海水に押し出され、もともと深海にあった水は水面までわきあがります。水面では風の力で海流が生まれ、水はふたたび南極や北極へと運ばれていきます。1,000年以上の長い時間をかけて世界を一周すると言われています。

スタンプラリーは南館だけですが、特別展の展示は北館、しおかぜ広場にも広がっています。さらに南極観測船「ふじ」やポートビルの海洋博物館と展望室でも、人間の出したゴミがどうしたら環境に影響を与えないか、ヒントとなる展示を行っています。水族館の展示と合わせてご覧いただくと、海洋プラスチックゴミ問題をより理解していただけたと思います。

Photo 1



イラストレーター光家作さんに描いていただきました。やわらかく温かみのあるイラストで、ストーリーを盛り上げます。(このスタンプ帳は有料(500円)です)

Photo 2



スタンプはコロナ対策で足踏み式にしました。スタンプ帳を枠にはめて押すと、正しい位置にきれいに押せます。

Photo 3



解説の横にはQRコードが設置してあります。解説をそのままデジタル端末に取り込むことができます。さらに詳しい情報を見ることができます。

Photo 4

VR(仮想現実)やAR(拡張現実)を楽しむこともできるQRコードもあります。ご自身のスマートフォンを使うのでコロナ対策も万全です。



海洋プラスチックゴミ問題の解決のヒントとなる展示を行っています。

Photo 5



スタンプラリーを全て回った人には再生コットンで作った「エコバッグ」をプレゼント。さらに南極観測船「ふじ」などの施設をまわると、絵本のキャラクターの缶バッジをプレゼント。

図 1

～2022年 よい一年になりますように～ “トラ似のいきもの” を展示しました



昨年末から1月16日までの期間限定で、今年の干支“トラ”にちなみ、オビトラフサンショウウオを展示しました。

水族館にやって来た、オビトラフサンショウウオ——触ると、冷たくツルンとしていました。餌のコオロギを瞬でパクッ！でも食事以外の時はほとんど

動かず、動いてもとてもゆっくりです。顔だけ出してコケの下にかくれ…コケの布団かけてる?! 逆に、コケの下に頭だけ潜り、体がまる見えの場合もあり…と、さまざまな姿を見せてくれました。

ふだんは水族館にいない生物ですから、飼育係のわたしたちも初々しく対面したわけですが、こんな生き物があるんだな、すごいなとおどろくばかりでした。オビトラフサンショウウオが暮らす自然の森を、いつか見てみたいと思いました。

鮮やかなトラもようのオビトラフサンショウウオ。北アメリカ大陸に分布するイモリの仲間、体長18-30cm、寿命12-15年ほどといわれています。森や草がしげった場所を好み、日中は土の中にかくれ、夜になると出てきて、昆虫やミミズなどの小さな生き物を待ち伏せて食べます。産卵期以外は、ほとんど陸で過ごします。

■ 飼育展示第一課 伊藤 美穂

ブルーガプールの 工事について



昨年の十月からブルーガプールは天井の耐震工事の為、展示は水上面の三階が全面休止、水中面の二階は一部期間休止となっております、皆様には大変ご迷惑をおかけしています。

工事中の三階部分は観覧通路上に足場が組まれ、外側はシートでおおわれた状態です。その様子はまるでヨーロッパで見られる巨大な城壁にも見えます。

こんなに巨大なものが設置されたので当初ブルーガたちは驚いていましたが、意外にもすぐに慣れ、その後普通にトレーニングができています。

ブルーガたちが安全に生活やトレーニングができるように私たちは万が一工事機材がプールに落ちてもすぐに回収できるようにダイバーを待機させたり、ブルーガたちが工事の音にどのくらい敏感かテストして確認したり、トレーニングに合わせて工事を中断または工事に合わせてブルーガたちを移動させたりといろいろと気を付けています。

工事は三月下旬に終了予定です。再び三階からブルーガが見られるまで今しばらくお待ちください!

まるで城壁のように足場が組まれています。

■ 飼育展示第三課 小串 輝

水族館 トピックス 2022 春

アオリイカの 「アカイカ」タイプを 初めて展示しました



日本のアオリイカは現在1種とされていますが、生態や遺伝子の違いによって「アカイカ」、「シロイカ」、「クアイカ」の3タイプが知られています。本州沿岸で見られるほとんどは「シロイカ」で約2kgまで成長することが知られていますが、「アカイカ」は3タイプの中でも最も大型に成長し、6kgを超すこともあります。種子島などでは重要な水産資源にもなっている「アカイカ」ですが、生活史は不明な点も多く、持続的な資源管理のため研究が進められています。

名古屋港水族館では三重大学と共同研究で種子島より「アカイカ」の卵を輸送し、ふ化飼育実験を行い、成長した個体を2021年12月より展示しています。当館では「アカイカ」の展示はこれが初めてになります。さらに今回は「シロイカ」と並べて展示をしているので、2タイプのアオリイカを見比べることができるようになっています。

2022年2月の時点では手のひらサイズの小さな「アカイカ」ですが、迫力のある大きな姿に成長してくれることを期待しています。

■ 飼育展示第一課 星野 昂大

アオリイカの「アカイカ」タイプと「シロイカ」タイプ。小さいうちは2つのタイプの見た目にほとんど違いはありませんが、アカイカの体色はシロイカに比べると茶色っぽい時がやや多いように感じます。



今年も「エンペラー ペンギンの落ちない羽根」を 用意しました。



ペンギンには、毎年決まった時期に全身の羽毛が新しく生え変わる「換羽(かんう)」という現象がおこります。名古屋港水族館ではエンペラーペンギンの換羽は12月ごろに見られますが、生え変わるとき、体から抜け落ちてしまう前に飼育係が回収した羽根を「落ちなかった」羽根＝落ちない羽根」として、平成26年より受験シーズンにお客様に差し上げてきました。

今年の受験シーズンは、昨年より始まった「ガチャde寄付※」の返礼品として、エンペラーペンギンの側頭部のわずかな範囲にのみ生えている貴重な黄色い羽根を使った「落ちない羽根」を準備しました。ペンギンの羽根をパウチ加工し、持ち運びやすいように紙製の入れ物に入れてリボンをつけてお守り風に作りました。

この「落ちない羽根」をお持ちいただくことで、少しでも緊張が和らぎ、本来のポテンシャルを発揮していただけたならば幸いです。

※ガチャガチャを使って、来館されたお客様にエサ代を寄付していただく仕組みの事です。

「エンペラーペンギンの幸せの黄色い落ちない羽根ガチャ」2月13日まで開催、たいへん好評でした。

■ 営業企画課 三島 秀規



寄鯨調査事業

飼育展示第二課 神田幸司

寄鯨(よりくじら)という言葉をご存じですか?古くからある言葉で、死んだり弱ったりして海岸に漂着あるいは座礁した鯨のことを言います。近年ではこうした現象を「ストランディング」といい、寄鯨という言葉はあまり使いません。ストランディングした鯨を調べると、その鯨の生活史や食性が明らかになったり、新種の発見につながることもあります。こうした鯨の調査は各地の大学、水族館、博物館などによって継続的に行われ、海洋生物の生態解明に役立ってきました。令和3年度から水産庁はヒゲクジラ類とマッコウクジラ、ツチクジラが漂着した際、年齢や性成熟、妊娠率などを中心に調査を行っています。この調査を寄鯨調査事業といい、実施主体は(一財)日本鯨類研究所と(一社)日本水族館協会です。

名古屋港水族館は令和3年12月22日に寄鯨調査事業に参加しました。名古屋港内で大型の死んだ鯨が漂着しており、これを台船に引き上げ調査を行いました。調査は(一社)日本鯨類研究所が中心となり、名古屋港水族館の他に、南知多ビー

チランドと三重県立総合博物館が参加しました。調査の結果、この死体はヒゲクジラの種類であるニタリクジラのメスであることがわかり、年齢は5~6歳、体長は11.7m、体重はおよそ8トンでした。水族館の職員でもヒゲクジラを実際に調査できる機会は滅多にありません。骨格や内臓の解剖学的な観察はもちろん、そのヒゲがとても柔らかいこと、腐敗の進んだ鯨の強烈な臭いなど、実物でしか得られない経験ができました。

この鯨はなぜ名古屋港内にいたのでしょうか。実は調査前の12月14日に大型貨物船が外洋で鯨に衝突し、船首にひっかたまま名古屋港に入港したのです。このようなニュースは時折聞かれます。鯨はとても巨大です。今回の未成熟の鯨でも漂着から焼却まで10日を要しました。古来、寄鯨は新鮮な状態であれば大きな海の恵み(食用)としてありがたがられてきましたが、今回のようなケースでは処分困るという側面もあるようです。



貨物船の船首にひっかっている鯨。



台船に乗せられた鯨。とても大きいはまだ子供である。



鯨の大きさ外見の特徴などを記録する。

わたしのスケッチブック

ツノダン

営業企画課 加賀 美月

ユニークな体の形と綺麗な縞模様。きっかけは覚えていませんが、小さい頃から好きな魚です。初めて海で見たのは、社会人になって石垣島でスキューバダイビングをした時。近づこうとしてもすぐに逃げられ、泳ぐのが下手で息も継がず...ただただ水面から眺めるばかりでした。次はスキューバダイビングでゆっくり見れたらなあと思います。



Zanclus cornutus

黄・白・黒の縞模様が美しいですが、夜になると、灰色がかった体色に変化するようです。

水族館で | ^{えすでいじーず}SDGs |

海の豊かさを守ろう 学習交流課 勝見 乃里江

水族館は、海の豊かさのおかげで成り立つ施設です。水槽の生き物の多くは、海からやってきました。生き物の餌としても、多くの魚介類を毎日消費し続けています。

さらに水族館は、水槽の水質管理のために莫大な量の電気を使用します。二酸化炭素の排出は、海水温上昇や、海洋酸性化といった海の環境問題の原因になり得ます。

水族館は、海の生き物たちの魅力や不思議さを広め、海の環境保護の重要性を人々に伝えるという役割を担ってきました。では、海洋が直面する様々な課題に対し、自身はどのような対処ができるでしょうか。餌の魚は持続可能な方法で収穫されたものを選んで購入することや、エネルギー消費量の削減をより積極的に実践することなど、お客様からは見えない部分の努力が求められます。水族館は変化の時を迎えているのかもしれない。

※SDGs(持続可能な開発目標)とは...

国連が決めた、誰一人取り残さない、より良い地球を作るために、2030年までに世界が一丸となって取り組むべき17個の国際目標



水族館スクールレポート School Report

愛知県環境調査センターで出張レクチャー実施 学習交流課 小倉 仁

12月11日、愛知県環境調査センターの「一般公開デー」で出張レクチャーを行いました。海の生き物を通して環境について楽しく学ぶことができる体験型プログラムとして、当館でのウミガメ飼育と研究の取り組みについてのレクチャー及びウミガメの一生を体感的に学ぶことができる「ウミガメサバイバルゲーム」を実施しました。参加者は定員16名に対し、1回目19名、2回目16名で、親子連れが中心でした。



参加者は熱心に聞いてくれサバイバルゲームは大変好評でした。



水族館から持参したウミガメの帽子を装備したスタッフがレクチャー実施の呼びかけをする、あっという間に参加者が集まりました。

SDGsのゴールの一つに「海の豊かさを守ろう」というものがありますが、海の問題を自分のこととして捉えるのはなかなか難しいことです。今回のレクチャーではサバイバルゲームを通してウミガメの暮らしを想像しつつ自分のこととして考えるのに役立ったように感じました。多くの人に海の現状を知ってもらうことも水族館の役割の一つです。